

一般講演 II

座長：大岡 均至（独立行政法人国立病院機構神戸医療センター）

大動脈周囲炎に対して漢方薬が有効であった1例

静岡県立総合病院 泌尿器科

千原 尉智路、杉山 恭平、室 悠介、公平 直樹
今村 正明、西尾 恭規、吉村 耕治

【緒言】

柴苓湯は抗炎症、抗アレルギー効果を有することから、ステロイド剤投与が適応とされる各種の疾患に対して、同様の効果を示すことがあるとされている。今回我々は動脈周囲炎に対して柴苓湯が有効であった症例を経験したため報告する。

【症例】

61歳、男性、右下腹部痛を主訴に近医を受診。腹部超音波にて右水腎症を認め、精査加療目的に当科紹介となった。CTにて大動脈分岐部から右総腸骨動脈に至る境界不明瞭な軟部影と同部位を閉塞機転とする右水腎尿管を認めた。大動脈周囲炎とそれに伴う尿管狭窄と診断し、プレドニゾロン20mg/日の内服で治療開始した。治療開始2週の時点で水腎の改善を認めず、柴苓湯9g/日を追加投与した。治療開始8週の時点でも水腎に変化を認めず、プレドニゾロンは中止し、柴苓湯単独で投与継続とした。すると、治療開始16週の時点で、水腎症の消失を認め、腹部単純CTでは動脈周囲軟部影の縮小も認めた。治療開始28週で柴苓湯は3g/日に減量、さらに40週で終了としたが、終了時で動脈周囲軟部影の増悪も認めず、寛解を維持していた。

【考察】

本症例ではステロイド終了し柴苓湯を単剤で継続投与した時期から大動脈周囲炎の改善を認めており、柴苓湯の有効性を示唆する結果であった。大動脈周囲炎と同様の病態を示す炎症性疾患として後腹膜線維症があるが、柴苓湯は後腹膜線維症に対して有効性を示すことが以前から報告されており、従って大動脈周囲炎に対しても同様の抗炎症作用をもたらす可能性が考えられる。従って、本症例のように、大動脈周囲炎においてステロイドによる短期的な治療効果が認められなかった場合には、柴苓湯の投与は治療オプションに十分なり得ると考えられる。

【結語】

大動脈周囲炎に柴苓湯が有効であった1例を経験した。柴苓湯はステロイドにみられるような、易感染性、胃潰瘍、糖尿病、骨粗鬆症などの副作用がなく、ステロイド使用が難しい症例やステロイド投与後も改善が認められない炎症性疾患では、投与を検討すべきと考えられた。